

白くてぼつてりとしたマグカップは、あっさりと砕けてしまった。思い出の清算。その瞬間の鋭利な音が、未だ耳にこびりついている。落下は、まるでスローモーションのようだった。陽は自分の手で形を奪ったそれから目を逸らし、その持ち主であつた小夜を見る。

「これは運命だつて思つてたのに」

キッチン^{キッチン}の床に広がるマグカップの残骸を見下ろしていた小夜は、そう呟いて欠片の一つを拾い上げた。

「バカみたいだね、アタシ」

小夜の細い指が欠片の断面を滑る。陶器の海に雫がぱたりと落ちた。白と紅のコントラスト。

「運命なんて信じちゃってさ」

小夜はそう言い、口元を歪ませて嗤つた。泣きたいなら泣けばいいのに。叫びたいなら叫べばいいのに。怒りたいなら怒ればいいのに。陽はそれができないでいる小夜^{小夜}のことが無性に腹立たしく、同じくらい憐れだつた。目の前の姿はあまりに痛々しい。

「姉さん、そろそろ休んだほうがいいよ」

陽は小夜の手から欠片をそつと取り上げた。華奢な指の先端に刻まれた一筋の線から滲む赤をぬぐう。生温か

い、ぬるりとした感触。

「ほら」

その場に立ち尽くし、なかなか動こうとしない小夜の手をとつて、陽はバスルームへと導く。小夜の手はひんやりと冷たかつた。

「熱いシャワーを浴びてさ。何も考えなくて寝ちゃいなよ。ね？」

そう言つて陽が前髪を掻きあげてやると、小夜はくしやりと笑つた。ぎこちない笑顔に胸が軋む。そんな顔はしないで欲しい。泣きたいなら泣けばいいのに。取り繕つた笑顔で小夜をバスルームへと押しやり、陽はその扉を背中^{背中}で閉めた。

「あんな奴のために、姉さんが傷つくことないのに」

陽は自分の両手をじつと見た。小夜の前で白いマグカップを落としてみせた手。目の前で、思い出を容赦なく壊してみせた手。マグカップは意外と重みがあつた。あの重みは、小夜の思い出の持つ重みだつたのだろうか。自嘲気味に嗤う。

背後からシャワーの水音が聞こえてきた。陽はそつと扉を離れ、割れたマグカップの待つキッチンへ向かう。水音の中に混じるであろう嗚咽を聞かないために。思い出の痕跡を片付けるために。

人工的な灯りの下、形を失くしたマグカップはいやに

白々としていた。まるで、あの男みたいに。

陽はあの男が嫌いだった。整った顔立ちでいつも穏やかに微笑んでいて。落ち着いた声で、優しい言葉や、恥ずかしいくらいに甘い言葉を並べて。いいところの御曹司で。陽から小夜を奪い去った男。そして、最後に小夜を裏切っていた男。赦せないし、赦すつもりもない。

陽はラックから新聞を抜き取り、そのうちの数枚を重ねて広げた。欠片をそんざいに拾い上げてはそこに乗せていく。カチャカチャと耳障りな音。

だいたい小夜も小夜だと陽は思っていた。あんな男に現を抜かすなんて。世間的に見ればいい男なのかもしれないが、あまりに出来すぎた人間はかえって白々しい。事実、あの男は小夜の元を去った。他に婚約者がいたらしい。馬鹿にするにも程がある。

定まらない怒りの矛先を持って余しながら作業をしていた陽の手がびくりと震えた。目に留まったのは白磁に浮かぶ一点の紅。小夜から離れた、しかし確かに小夜のもの。心の底が凍える。恐る恐る触れると、温度を失くしたそれはなぞった指の軌跡を描いた。

衝動だった。消沈した小夜からあの男との結末を告げられ、気づいたときにはもうサイドボードからマグカップを取り出していた。陽がそれを高く掲げたとき、小夜は呆然とそれを見つめていた。あの男から贈られた、小夜とあの男のおそろいの白いマグカップ。陽は飾り気の

ないそのカップを見て、なんてつまらないものを揃えるのだろうと思つたが、小夜はそれをえらく気に入ったようだった。あの男が家を訪れるたびに、嬉しそうにココアやカフェオレをそのカップで淹れた。白くてぼつたりとしたマグカップ。小夜の視線は掲げられたそれに注がれていた。やめて、という小さな声が聞こえた気がしたが、陽は何も言わずにそつと手を離れた。小夜の絶るような瞳が頭から離れない。

陽は赤い化粧が施された欠片をそつと拾い上げた。小夜を傷つけた欠片は、その紅によつてまるで欠片自身が傷ついているように見えた。それをじつと見ていた陽は、おもむろに欠片を指先にあてがった。鋭利な断面が陽の指先を傷つける。その指先を滑らせ、鮮やかな赤で白い欠片を汚した。

「はは、はははは」

小夜の思いついた出を壊したのは、汚したのは誰？

小夜を傷つけたのは、誰？

胸中に渦巻き込み上げてくるものを抑えながら、その一部を少しだけ吐き出すように嗤った。

微かに届いていた水音が止んだ。それと入れ替わりに、だいぶ長い時間使用中だったバスルームの扉が開かれる音がした。片付けを終えて自室に戻り、ベッドに身を投げ出していた陽は静かに目を閉じた。小夜の気配を感じ

取る。

拾い集めた欠片は、陽の部屋へと運ばれた。とにかく小夜の目に留まるところに置いておきたくなかったこともあるが、陽自身がどうしていいかわからなかったからだ。新聞紙に丁寧に包まれたそれは、鍵付きの引き出しの奥へとしまわれた。

捨ててしまったかった。けれど捨ててはいけない気がした。小夜のためか、陽のためか。それはわからないけれど。とにかく駄目な気がした。

あの時、マグカップを落としたあの時、本当に泣き出したかったのは、小夜ではなくて陽だった。だけどそれは許されないことだから。だから小夜に泣いてほしかった。

あの男は確かに小夜を愛していた。そして陽のことを気にしていた。小夜と陽は、半分しか血が繋がっていない姉弟だから。気づいていた。わかっていた。これみよがしに揃えられたマグカップ。あのマグカップは牽制だった。あの男は知っていたのだ。陽の心の内を、その愚かしさを。

それは陽にとつての戒めでもあった。しかしそれを砕け散らせてしまった。自分の手で。

小夜の足音が近づいてくる。控えめなノックの音。

「ヨウちゃん、起きてる？」

陽は返事をしなかった。寝ちゃったの？と再び問われ

た後、キィ、と小さくドアが開かれる音がした。

「今日は、なんだかごめんね」

起きていることを知ってかしらさずか、小夜は小さな声でぼつぼつと話しかける。近づく小夜の気配。

「ちよつとみつともなかったね。もう大丈夫だから」

そんなはずはないのに。そう思いながらも陽は言葉を返さない。ただ目を閉じていた。ふわりと空気が動いて、そつとブランケットがかけられる。

「今度、ふたりでおそろいのマグカップ買いに行こうか」
そう言うって小夜は、姉弟でおそろいなんてイヤかな、

と小さく笑った。

「ヨウちゃん」

呼びかけた後に少しの間を空け、言葉をつむぐ。

「ありがとう」

しばらくの沈黙の後、小夜は部屋を出て行った。パタン、と扉が閉められ、小夜の足音が遠ざかっていく。その後しばらくキツチンで物音がしていたが、やがてそれも静かになり、小夜は自室に戻っていったようだった。

陽は閉じていた目をゆつくりと開いた。ブラインドの隙間から届く光をたよりに、サイドテーブルを探る。指に触れた、ひんやりとしたもの。新聞紙にひとつだけ包まれなかったもの。手を掲げ、光の下に晒す。つるりとした白磁に、乾いた赤色。

陽は、溢れ出るままにまかせて涙を零した。

ねえ知ってるかい？ 姉さん。

姉さんからあの男との結末を聞いたとき、俺は嬉しかったんだよ？ 姉さんの目の前でカップを落とすとき、俺は笑ってたんだよ？

ごめんね、傷ついたかい？ 幻滅してしまった？ 俺のことを嫌いになっても構わないから。

だけどうか。

どうか、赦してほしい。そんなことは狡いってわかってる。俺はどうかしているのかもしれないね。

姉さん。姉さん。

「愛してるよ」